様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月 ２９ 日現在

機関番号：１２１０３
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ１６７４０

研究課題名（和文）聴覚障害者情報支援のための舞台芸術手話通訳技術研修カリキュラムの開発と作成

研究課題名（英文）Development of a curriculum for Sign Language Interpretation in Performing Arts

研究代表者
萩原　彩子（HAGIWARA, Ayako）

筑波技術大学・障害者高等教育研究支援センター・助教

研究者番号：３０４５５９４３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,800,000円

研究成果の概要（和文）：聴覚障害者の社会参加に伴い，我が国でもさまざまな場所で手話通訳がなされるようになっており，舞台芸術活動における手話通訳も今後の広がりが期待される。
本研究は舞台芸術における手話通訳（以下，舞台芸術手話通訳）に着目し，芸術分野における手話通訳に関するプログラムを開発することを目的に実施した。
舞台手話通訳に必要な技術として，高い翻訳技術はもちろん，舞台芸術に関する経験・技能が役立つことが明らかになった他，制作側との協働のあり方が非常に重要であることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の結果、舞台芸術作品の手話通訳において具体的に必要とされる環境整備や通訳方略が明らかになったことで、これまで独自に対応してきた手話通訳者がこの分野に特化したトレーニングを積むことが可能になり、今後さらに増えるであろう舞台芸術分野における手話通訳の質をより高めることが期待される。
手話通訳の質が高まることで、聴覚障害者の文化芸術分野への参画がより容易になり、さらなる社会参加が可能となる。

研究成果の概要（英文）：In recent years, the use of sign-language interpretation has been gradually increasing in various situations. Additionally, sign-language interpretation in the performing arts is also expected to further expand in the future.
The purpose of this research is to develop a program for sign language interpretation specialized in performing arts. As a result, it was found that not only high translation skills, but also practical experience and skills in theatre performing arts are useful for theatre sign language interpreters. And sign language interpreters need to collaborate with the people concerned about theater such as theater organizer, producer, production manager and so on.

研究分野：手話通訳、情報保障

キーワード：手話通訳　舞台芸術　聴覚障害者支援　演劇　アクセシビリティ

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

昨今、聴覚障害者の社会参加が進むにつれ、さまざまな場面における手話通訳ニーズが高まっており、舞台芸術活動の鑑賞もまたその１つである。 しかしながら、音声情報が中心となる舞台芸術活動については、聴覚障害者に十分なアクセシビリティが確保されておらず、参加が制限されている状況が続いている。また、少ないながらも行われている聴覚障害者へのアクセシビリティとしては、台本の貸し出しや台詞の字幕投影、磁気ループ等の補聴システムが多く、手話通訳が付与される割合は他に比べて低いことが明らかにされている。さらに、厚生労働省が定める手話通訳者養成カリキュラムでは演劇等の舞台芸術活動の手話通訳を想定した技術指導はなされておらず、手話通訳者個人の技量や努力に委ねられている現状がある。

このように、舞台芸術活動における手話通訳は聴覚障害者の社会参加の 1 つの方法として必要とされているにも関わらず、我が国の舞台芸術活動における手話通訳はまだ未整備であり、その養成が急務となっている。

２．研究の目的

本研究では、舞台手話通訳の先進事例から、舞台手話通訳における問題点を洗い出すため、舞台芸術手話通訳の経験者や聴覚障害者にインタビュー調査を行う。また舞台芸術活動における手話通訳者養成ならびに実際の通訳活動について、イギリスとアメリカを視察し、舞台芸術活動における手話通訳に必要な技術を明らかにする。そのうえで舞台芸術活動に特化した手話通訳の技術研修プログラムを開発し、活用しながら問題点等を検討することを目的とする。

３．研究の方法

①イギリスにおけるアクセシビリティ公演ならびに舞台芸術手話通訳に関する視察

以下の内容で、視察調査を行った。

・視察期間

2016 年 10 月 6 日（木）～10 月 11 日（火）（移動日含む）

・視察地

イギリス　ロンドン市

・視察内容

（1）イギリスにおけるアクセシビリティ公演の案内に関する調査

（2）手話通訳付き舞台芸術公演視察（2 ヶ所）

（3）舞台芸術を専門とする手話通訳者とのミーティング

②舞台演劇に特化した手話通訳技術に関する一考察

舞台手話通訳のモデル事例として実施された公演から、①で指摘された舞台手話通訳の特徴となる３要素（役者のフィジカルな特徴を反映させた手話通訳、視線の誘導、効果音の通訳）が見られた場面を抽出し、分析を行った。抽出した場面について役者の台詞・動作、効果音・音楽、通訳者の手話・動作を時間経過に沿ってできるだけ細かく記述したトランスクリプトを作成し、訳出内容や訳出方法、舞台上でのふるまい（動き）について、演劇の内容との関係や、一般的な通訳方法との違いに着目した。

③舞台演劇に特化した手話通訳技術に関する研究－手話通訳者へのインタビュー調査－

②で対象とした公演において手話通訳を担当した通訳担当者 1 名を調査対象者とし、（1）通訳上工夫した点、（2）通訳上苦労した点や困難点、（3）その他通訳を振り返って思うこと、の３項目について、半構造化面接法を用いたインタビュー調査を実施した。

映像を視聴しつつ、（1）～（3）について回答したい場合調査対象者が挙手し、映像を止めてその都度口頭で回答をすることを映像終了まで繰り返した。分析にあたってはＫＪ法を用い、インタビューの音声データから逐語録を作成して精読し、意味のある最小単位のまとまりを抜き出してラベルとした後、それらを本研究のリサーチクエスチョンに照らし合わせ、カテゴリーを生成し、カテゴリー同士の関係性を検討して図解化および文章化した。

④ボストンにおけるアクセシビリティ公演ならびに舞台芸術手話通訳に関する視察

以下の内容で、視察調査を行った。

・視察期間

2018 年 4 月 14 日（土）～4 月 20 日（金）（移動日含む）

・視察地

アメリカ合衆国　ボストン市

・視察内容

（1）舞台手話通訳付公演視察および手話通訳担当者へのインタビュー

（2）舞台手話通訳者へのインタビュー

（3）Northeastern 大学授業見学および ASL Program ディレクターへのインタビュー　他

⑤舞台演劇に特化した手話通訳技術に関する研究－聴覚障害者へのインタビュー調査から－

②で対象とした公演における舞台手話通訳について利用者からの評価を得るため、聴覚障害者へのインタビュー調査を実施した。調査対象者はいずれも手話を日常的なコミュニケーションとして用い、演劇経験ならびに舞台演劇の観覧経験のある聴覚障害者とし、３名から協力が得られた。方法としてはフォーカスグループインタビュー形式で実施し、対象映像を場面で区切り、視聴と半構造化面接法によるインタビューを場面ごとに行う形で実施した。分析にあたってはKJ 法を用い、インタビューの動画データから逐語録を作成して精読し、意味のある最小単位のまとまりを抜き出してラベルとした後、本研究のリサーチクエスチョンに照らし合わせ、カテゴリーを生成し、カテゴリー同士の関係性を検討して図解化および文章化した。

４．研究成果

①イギリスにおけるアクセシビリティ公演ならびに舞台手話通訳に関する視察

視察の結果、イギリスにおいてはアクセシビリティ公演の案内が充実しており、劇場や劇団等が運営するウェブサイトやメールサービスにより、聴覚障害者が容易にアクセシビリティ公演の情報にアクセスすることが可能であった。さらに特筆すべき点としては、文化庁等からの助成金で活動している団体によってアクセシビリティ公演に特化したウェブサイトが運営されていることで、ユーザーは希望するアクセシビリティから公演を検索することが可能なうえ、同一サイトからチケットの購入まで行える等、非常に利便性の高いシステムが構築されていた。その他、舞台手話通訳を専門とする通訳者を含む関係者へのインタビューでは、舞台手話通訳の特徴として３つの要素（役者のフィジカルな特徴を反映させた手話通訳、視線の誘導、効果音の通訳）が挙げられた。

②舞台演劇に特化した手話通訳技術に関する一考察

分析の結果、役者のフィジカルな特徴（動作や身体的特徴等）を取り入れた通訳が見られ、話者の明確化の手段として活用されていることが推察された。また視線の誘導としては、役者の動き等に注目してもらいたい場面において通訳者が自らの視線を使って観客の視線を役者に誘導する場面が見られ、舞台手話通訳では役者たちの動きについても事前に把握しておくことが重要であることが示唆された。さらに効果音については、通訳上の時間的な制約があるため、話の展開により重要な意味のある音情報を取捨選択しつつ的確に表現する必要があることが示唆された。

また、舞台手話通訳では通訳者の事前準備が非常に重要であるが、そのためには舞台制作側からの台本提供や稽古の見学等の協力が欠かせず、通訳者と制作関係者との協力関係が重要であることが推察された。

③舞台演劇に特化した手話通訳技術に関する研究－手話通訳者へのインタビュー調査－

インタビューの逐語録から、67 個のラベルが抽出され、22 の小カテゴリーが生成された（表 1）。次にそれら小カテゴリー同士の類似性から、10 の中カテゴリー、さらには 3 の大カテゴリーが生成された（表 1）。

表1　舞台手話通訳における手話通訳の工夫点と困難点に関するカテゴリー

大カテゴリー	中カテゴリー	小カテゴリー	ラベル数
環境整備	舞台演出との協働	世界観を壊さずかつ利用者から見やすい立ち位置	2
		全体の演出に沿った照明の色やタイミング	2
		世界観に合いかつ通訳しやすい服装	1
	手話通訳の監修	監修者の役割	2
		監修者との共同作業によるブラッシュアップ	1
手話通訳・翻訳技術	翻訳の難しい単語やセリフへの対応	該当する一般的な手話単語がない場合の工夫や苦労	6
		英語のセリフの翻訳の工夫	1
		登場人物名の手話表現を事前に設定する	2
	サブテキストも含めた的確な通訳・翻訳	登場人物の関係性を適切に表す空間表現	1
		サブテキストも考慮した適切な手話語彙の選択	7
		役者の演じる感情に沿った通訳・翻訳	6
	話者の明確化	複雑なロールシフトへの対応	4
		役者の動作を取り入れた通訳・翻訳	5
	進行に遅れない通訳	速さへの対応と取捨選択	3
	状況通訳	効果音や BGM の通訳	3
	アドリブへの対応	アドリブが聞き取れなかった時の対応	1
舞台上でのふるまい	意識的なふるまい	観客の視線を誘導する視線の送り方	5
		「間」の間のふるまい	3
	自身への気づきと反省	立ち方	5
		姿勢	2
		表現上の癖	2
		通訳モードを長時間維持できる集中力	3

大カテゴリー同士の関係性としては、【環境整備】のもとに【手話通訳・翻訳技術】と【舞台上でのふるまい】が行われており、【環境整備】がそれらの下支えとなることがうかがえた。また【手話通訳・翻訳技術】と【舞台上でのふるまい】は相互に影響しあっていることが推察された。

④ボストンにおけるアクセシビリティ公演ならびに舞台芸術手話通訳に関する視察

いずれのインタビューにおいても、①で指摘されていた 3 要素の重要性が語られており，これらが我が国の舞台手話通訳においても重要な要素となり得ることが改めて示唆された。また、演劇に関するバックグラウンドを持っていることが舞台手話通訳において有益であることが推察された。欧米と異なり日本では演劇に関するバックグラウンドを持つ手話通訳者はあまり多くないと思われるが、手話通訳者を対象とした演劇に関するワークショップ等を通じて演劇の経験を積んでもらうなどの方法が有効なのではないかと考えられた。

⑤舞台演劇に特化した手話通訳技術に関する研究－聴覚障害者へのインタビュー調査－

インタビューの逐語録から、70 個のラベルが抽出され、次にそれら小カテゴリー同士の類似性から、7 の中カテゴリー、さらには 3 の大カテゴリーにまとめた。大カテゴリーとしては【手話通訳・翻訳技術】【舞台上でのふるまい】【環境整備】とし、③と同様の大カテゴリーとしてまとめた。

【手話通訳・翻訳技術】としては、「台詞の適切な翻訳」として、例えば『はい』のように短い台詞に込められた意味や感情を正しく読み取ったうえでの翻訳（サブテキストの的確な理解）を求める意見があった他、時間的制約と翻訳量のバランスを考慮する（翻訳量の調整）、翻訳精度を高めるための（手話監修者との協働）の必要性が語られていた。また、対象作品がテンポの速い会話劇だったこともあり言及が多かったと思われる「話者の明確化」については、役者の向きと合わせた表現（RS（ロールシフト/リファレンシャルシフト）と方向の一致）や（役者の動作を取り入れた通訳）を求める意見が見られた。その他、（キャラクターに合った語彙の選択と表現）による混乱の回避や（役名の手話表現の作成）、そもそもの通訳担当者の増員（複数人の配置）への提案もあった。

【舞台上でのふるまい】については、必要に応じて役者（舞台）に注目を向けさせる「視線の誘導」に関して、中途半端にならない（明確な視線の誘導）を前提としながらも、視線を向けている間の台詞もできれば省略せずに通訳して欲しいとする（最低限の台詞の省略）を望む声があり、そのために視線を誘導しながら通常時よりも小さく手話表現を行うこと（表現の大きさの調整）が有効なのではないかという指摘があった。その他、全体的な「通訳のスタンス」として（世

界観への寄り添い）ができる通訳者を望む意見や、（衣装と髪型）や（台詞と関係ない動きの抑制）といった「身だしなみと姿勢」に関する指摘があった。

演劇経験者であり手話指導にも携わっている聴覚障害者を対象としたインタビューであったため、具体的な通訳・翻訳技術に関する知見を多く得ることができ、⑥の大いなるヒントとなった。

⑥舞台手話通訳養成・研修プログラムの作成と検証

①～⑤の成果をもとに、特定非営利活動法人シアター・アクセシビリティ・ネットワークの協力を得ながら、舞台手話通訳養成・研修プログラムの作成に取り組んだ。さらに作成したプログラムは同団体が主催した舞台手話通訳養成講座（平成 30 年度、令和元年度開催）の一部で実践され、講師ならびに参加者からのフィードバックを受けて、さらに改良を加えた。

表2　舞台手話通訳養成・研修プログラム（抜粋）

種類	目的と内容
演劇トレーニング	感情の表出や身体表現等、演劇の基礎を学ぶ。（手話での演劇トレーニングを含めること）
翻訳トレーニング	台本を読み込み、登場人物のキャラクターやサブテキストを押さえたうえで、手話に翻訳する。
通訳トレーニング	翻訳した手話をもとに、役者の台詞に合わせた表出を行う。同時に、役者の台詞・動きのタイミングや演出意図等をつかみ、、訳出の修正を行う。
実践トレーニング	実際の舞台を想定し、舞台手話通訳者として必要な環境整備から、稽古、当日の本番までを体験する。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計7件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　6件）

１．著者名 萩原彩子	４．巻 16
２．論文標題 舞台演劇に特化した手話通訳技術に関する研究－手話通訳者へのインタビュー調査から－	５．発行年 2019年
３．雑誌名 日本手話通訳士協会・日本手話通訳学会2018年度研究紀要	６．最初と最後の頁 91-96
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） http://hdl.handle.net/10460/1950	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 萩原彩子	４．巻 Vol.24 (2)
２．論文標題 イギリスにおけるアクセシビリティ公演ならびに舞台芸術手話通訳に関する視察報告	５．発行年 2017年
３．雑誌名 筑波技術大学テクノレポート	６．最初と最後の頁 39-44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） http://www.tsukuba-tech.ac.jp/repo/dspace/handle/10460/1560	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 萩原彩子
２．発表標題 舞台演劇に特化した手話通訳技術に関する一考察
３．学会等名 日本手話通訳学会
４．発表年 2017年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考